

中国の言語と文化

—漢字という視点から—

馮 富榮

はじめに

言語は、一応独立した体系をなしているものであるが、独立して存在するものではない。言語は、文化と切っても切れない関係がある。なぜならば、文化は言語によって表現され、言語はまた文化の制約を受けなければならないからである。つまり、言語は、つねに文化によって支えられて機能している。この世に生まれた人ならば、誰もが一定の文化環境のなかで育てられ、その環境の生活様式、思考様式、風俗習慣、道徳価値観などの文化要素を吸収しなければならない。そしてまた、それらの文化要素は、逆にその人の言語行動に反映されなければならない。いわば、言語表現に反映できない文化要素はないということである。

文化習慣が違くと、言語表現も違ってくる。たとえば、近所の挨拶としては、日本では、「いいお天気ですね」と天気のことを言うが、中国では「どこへ行きますか?」、「食べましたか」などと言う。このような文化習慣の違いを知らないと、ただその言語を学習していても、おそらくコミュニケーションがうまく行かないと思われる。たとえば、近所の中国人から、いきなり「どこに行きますか」と聞かれても、日本人はおそらくいやな感じがして、返事に困ってしまうであろう。逆に、道端で出会った日本人から「今日はいいお天気ですね」と言われても、中国人は、きっと「この人はちょっと変だね」と思うであろう。もし中国人の女性が、日本人の男性からそのように声を掛けられたら、「この人は私をデートに誘っているのではないかと誤解するかもしれない。

このように、第二言語を学習するとき、その言語の文法、語彙の意味のみを学習するだけでは、不十分である。言語の学習とともに、その言語を支えている文化、習慣も同時に学習しなければならない。第二言語として中国語を学習するときも例外ではない。中国語の教育者としては、中国語という言語のみでなく、中国語を支えている中国の文化も中国語の教育に取り入れる必要がある。そこで、以下のことを提案する。

- 1) 語彙の学習に漢字の文化的意味の紹介を入れる。例で言うと、中国語の「強」を学習するとき、中国では、この「強」は男性のみでなく、女性に対してもプラス評価となりうること、「強女人」は女性への誉め言葉であることを紹介する。
- 2) 中国語の会話の学習に中国人の語用習慣の紹介を入れる。たとえば、中国語の「長命百歳（“長生きをするように”という意味）」を学習するとき、これは赤ちゃんにしか使えないこと、すなわち、老人に対しては「長寿」と言わなければならない、決して「長命百歳」を使ってはいけないことを説明する。
- 3) 中国語の統語レベルの学習に中国人の思考様式や価値観などの紹介を入れる。たとえば、相手を否定しても、日本人は簡単に“No”とは言えないが、中国人ははっきり“No”と

言う。それは、日本人は相手を傷付けることを何よりも避けようとし、“はっきり”よりは“以心伝心”のほうがよいとされるが、中国人は目標を損ねてまで円滑さを保とうとするのがずるいとされ、“以心伝心”よりは“はっきり”したほうが人格は立派だとするからである。

本論は、中国の漢字文化を紹介することを目的とするが、漢字の歴史、漢字に内包されている文化的意味、全体の要約という三つの部分に分けられる。第一部では、言語の表記単位と漢字の作る方法という二つの視点から漢字の歴史を概観した。第二部では、色彩・動物と植物を表す漢字に内包されている中国の代表的な文化的意味が紹介された。第三部は、全体の要約と今後の研究課題である。

一、漢字の歴史

中国の漢字が誕生して以来、すでに五、六千年の歴史があり、中国だけでなく、日本、韓国などの文化においても大きな役割を果たしてきた。何千年以来、漢字は、形においても、発音においても、また表記単位においても大きな変化が起こった。何千年の歴史の中で、漢字を「表音文字」に変えようという試みがたびたびなされた。しかし、漢字は歴史から抹消されることはなかった。他の文字と比べ、漢字は、書く面倒さをもちながらも依然として力強く生きつづけている。それは、おそらく漢字が他の文字が類することのできない特別な機能をもっているからであろう。その特別な機能として考えられるのは、まず漢字の象形機能が挙げられよう。たとえば、われわれ漢字圏の人は、「苗」という意味の分からない新しい漢字に出会ったとき、すぐこれはきっと田んぼと関係があると判断するであろう。それは漢字が象形機能をもっているからである。漢字のこのような象形機能は、われわれ漢字圏の人にとってはたいへん便利なものである。

以下、表記の単位から漢字の歴史を概観してみよう。まずそれをおおまかに分けると、下記のような四段階にまとめられる。

第一段階は、絵から絵文字への段階と言われている。この時期の絵文字は「表意文字群」に属し、それによって記されたことは語彙ではなく、短文の意味である。いわば、一文字、または一つの単語では表現できない内容である。

第二段階は、漢字の成熟段階に入り、すなわち甲骨文や金文の段階である。この段階は、一文字の単語がほとんどであるので、この時期の漢字は「表詞文字」と言われている。つまり一文字が一つの意味をなしている。

第三段階に入ると、二文字の単語が徐々に多くなり、一文字は、一つの意味に用いられるほか、「語素」（「詞綴り、詞根」の意）にも用いられるようになった。つまりこの段階では、二文字の単語が現れ始めた。

近代、現代となって、漢字は第四段階に入った。現在、二文字の単語がほとんどである。つまり、一文字が一つの単語をなすのではなく、単語の一部分である「語素」を表すのである。

一方、漢字を作る方法という視点から漢字の歴史を概観してみると、以下のような三段階にまとめられる。

第一段階では、「形符」（ものの形を取って漢字を作ること。たとえば木の形を取って木の意味を表すこと）から「意符」（特定の「形符」をもって特定の意味を表すこと。たとえば「林」や「森」のように、木という「形符」を用いて木と関連のある事柄を表すこと）へと変化する段階である。

第二段階では、「意符」の組み合わせが行われ、それによって「合体字」が作られる。「意符」の組み合わせ方法は、二種類ある。一つは「意符」と「意符」の単純な組み合わせであり、「休」（人が木に凭れて休んでいる様子）や、「苗」（田んぼに植えたもの）などがその例である。いま一つは「意符」と「意符」の組み合わせによって作られた「合体字」にさらに「意符」をつけ加えて、新しい「合体字」を作ることである。例えば、「辟」はもともと「合体字」で、“刑法”を意味している。この「辟」という「合体字」に新たな「意符」を加えて作った「僻」や「避」は、それぞれ“逃避”や“僻む”ということを意味している。

そして第三段階になると、「形符」と「声符」（漢字の音を表す標識のこと）の結合によって、新しい漢字が作られるようになる。例えば、「桃」や「梨」などは、「木」をもって木からの果物を表し、「兆」と「利」の近似音をもってその漢字の発音を表している。

以上分かるように、漢字は、表記単位が変わっていても、また作る方法が変化していても、漢字の「形をもって意味を表す」という基本的な象形機能は変わらない。

二、漢字に内包されている文化的意味

日本語と中国語には、共通に使用されている漢字がたくさんある。なかには、漢字も意味も同じのものもあれば、漢字は同じだが意味が違うものもある。前者としては、“人”、“女”などの例があるが、後者としては、“手紙”や“湯”などの例がある。日本語の“手紙”をそのまま中国語に訳すと、“トイレットペーパー”の意味で、また“お湯”は、“スープ”のことである。友人が中国へ旅行に行ったとき、お腹をこわして入院してしまった。入院中、お風呂に入りたくなかったが、お湯が出てこなかったので、看護婦にお湯がほしいと手に文字を書いて頼んだ。そして待ちに待ったすえ、温かいスープが運ばれてきたそうである。

以上のように、同じ漢字だが意味が違うもののほか、漢字も意味も同じだが、内包されている文化的な意味が違うものもある。たとえば、中国語の「老」と「狗」は、日本語と同じで、それぞれ“古い”と“狗”の意味である。しかし、この二つの漢字に内包されている文化的意味は、日本語と中国語ではおおきくかけ離れている。中国語の「老」は、尊敬の意味が内包され、マイナスよりはプラスのイメージが強い。たとえば、中国では、大文豪である郭沫若先生が「郭老」と呼ばれている。それは決して軽蔑の意味ではなく、かなり尊敬的な表現である。つまり、中国語の「~老」は、ある分野での権威的な存在を指すときに使われる。しかし日本語の“古い”は、プラスよりはマイナスのイメージが強いと思われる。ゆえに、日本人の偉

い方がもし“名字+老”と呼ばれたら、喜ぶどころか、逆にたいへん怒ってしまうのであろう。

一方、「老」とは違って、中国語の「狗」にはマイナスの意味が内包されているのに対し、日本語の「狗」にはプラスの意味が内包されている。中国人は、相手を軽蔑するとき、または罵るときによく「狗」を使う。たとえば、「狗東西」、「走狗」や「狗杖人勢」などがある。いずれも軽蔑の表現である。しかし中国語と違って、日本語の“狗”には、非常にかわいらしいイメージがあるので、「ワンちゃんみたいにかわいい」と友達の赤ちゃんを誉めても不自然ではない。しかし、このままの中国語で中国人の子どもを誉めたら、たいへんなことになる。友達の縁はきっとこれで終わってしまうと思う。

以上、分かるように、中国語の漢字に内包されている中国の文化的な意味が分らないと、中国語を学習していても、その学習した中国語を適切に使えるか否かは問題である。ゆえに、中国語の漢字を学習するとき、その漢字に内包されている文化的意味を学習することもたいへん必要である。以下、中国語の漢字に内包されている文化的な意味を色彩、植物、動物の順で説明していく。

①色彩

赤色：中国人は、“赤”、つまり「紅色」というと、すぐ太陽や火を連想する。太陽や火は、暖かさや幸福をもたらしてくれる。中国では、昔から「紅色」を使って、光明や幸福、喜びを象徴する。たとえば、中国人が結婚するとき、花嫁の服はもちろん、新婚夫婦の部屋のカーテンや、テーブルカバー、風呂敷包みなどはすべて赤色でなければならぬ。また「那個人非常紅」というと、“あの人は非常に活躍している、非常に人気が高い”という意味である。中国共産党の軍隊も以前「紅軍」と呼ばれていた。中国の中学校や高等学校などでは、「走又紅又専的道路」という教育が行われ、それは“思想も道徳もよく、勉強もよい道を歩もう”という意味である。以上のほか、中国語の「紅」はまた成功の意味ももっている。たとえば「開門紅」というのは、“年始の大成功”または“開業の大成功”を意味している。

白色：雪や人の皮膚などを形容するときは、マイナスの意味ではないが、それに内包されている文化的意味は、マイナスのものである。中国語の「白色」は、死亡、恐怖などを象徴している。たとえば、葬式するとき、なくなった人の親族は、靴から、服及び帽子までは、すべて白いものを着装しなければならない。四十年代、共産党と国民党が戦ったとき、国民党の支配している地区は、共産党によって「白色統治区」と呼ばれていた。また「那個人小白臉」というと、“あの人は狡賢くて、付き合いにくい”という意味である。中国語の「白」には、また“思想や道徳が悪い”意味もある。たとえば「那個人走白専道路」というと、“あの人は、勉強ばかりやっているが、社会奉仕の精神はない”という意味である。

黄色：中国文化の発祥地は、黄河流域であるので、中国語の「黄色」は、中国の大地、中華民族を象徴している。また中国では、黄色は中和の色、自然の色とされているので、尊いの色とされている。ゆえに、むかし中国の皇帝の服や、皇帝の使っているものはすべて黄色である。よって「黄色」には、尊き、高貴などの意味が含まれる。たとえば、「学生時代是黄金時

代」というのは、“学生時代は、最高の時代だ” という意味である。また「飛黄騰達」は、“事業に成功し、金銭及び地位の面において最高の状態にある”ことを意味している。しかし、近年西洋の影響によって、「黄色」にはマイナスの意味が加えられるようになった。たとえば、ヌード雑誌類を「黄色雑誌」と呼ぶ。さらに秋になると、葉っぱが黄色になることから、中国語の「黄」には、また“おしまい”や“失敗に終わる”という意味もある。たとえば「那件事又黄了」は、“あの事はまた失敗に終わった”という意味である。

黒色：中国の「黒色」にも、「黄色」と同じで、プラスとマイナスの両方の意味が内包されている。プラス意味の例としては、中国の伝統的な京劇の「臉譜」は、よく黒色をもって正義、忠節を表現する。マイナスの例としては、葬式のときには、よく黒色が用いられる。たとえば、日本では、家の表札は黒地に白文字のものが多く、中国では、おそらく同じような表札は見かけられないであろう。それは、中国人から見ると非常に不吉な感じがし、葬式と連想しやいからである。また「黒色」は夜と連想しやすいので、暗黒という意味も持っている。たとえば国民党の支配していた中国の社会を、いま大陸では「黒暗的社会」と言う。「黒交易」や「心黒」などは、それぞれ“やみの商売”や“残酷”などを意味している。

②植物

松：松は、常緑樹である上、寿命も非常に長いので、長寿のシンボルとしてよく用いられる。ゆえに「寿比南山不老松」という言い方がある。中国人のお墓の上にも松が植えられるが、それは死者の魂が永遠に生きることを象徴する。中国人は、お客さんを迎えるとき、客間によく松を飾るが、それを「迎賓松」という。厳しい冬のなか、寒い風のなかで山の上に聳え立っている松の姿から、中国人は、一切の困難を恐れず、意志がたいへん強いことを松で象徴する。要するに、中国人は、松の長寿をもって人間の長生きを表し、松の常緑をもって人間の友情はいつまでも栄えることを意味し、また厳しい寒さを凌いで立派に生きている松の特徴をもって、人間の節操や気骨を象徴する。

竹：竹は、植物のなかでの特別な存在として、昔から中国の詩人によって歌われてきた。たとえば、宋代の大詩人である蘇東坡がかつて「可使食無肉、不可居無竹。無肉使人瘦、無竹使人俗…」と言ったことがある。また白居易も次のように竹を賞賛している：「竹本固、固以樹徳…。竹性直、直以立德。竹心空、空以体道。竹節貞、貞以立志。（中略あり）」。要するに、竹のまっすぐな姿は、人間の歪みのない立派な性格を象徴し、竹の堅さは人間の固い意志を比喻し、また竹の節は、人間の節操、道徳、気骨の高いことを意味している。さらに竹の優雅さは、俗世界から離れた人間の高雅さを代表している。

梅：厳しい冬のなか、他の花がみな寒さに耐えられなくて落ちている頃、梅だけが咲いている姿は中国人から高く評価されている。梅を賛嘆する詩歌がたくさんあるが、ここでは、古代と現代の代表作を一つずつ紹介しよう。古代詩の代表作として陸游の詠梅が挙げられる。それは「驛外断桥辺、寂寞開無主。已是黄昏独自愁、更著風和雨。無意苦爭春、一任群芳妬。零落成泥碾作塵、只有香如故。」である。ここで陸游は、環境がどんなに厳しくても、どんなに唐

げられても、たとえ通る車にひかれて泥状態になったとしても、その香りが依然として残るといふ梅の強い生命力を称えている。一方、現代詩として毛沢東の詠梅が数えられる。それは「風雨送春帰、飛雪迎春到。已是懸崖百丈氷、猶有花枝俏。俏也不爭春、只把春來報。待到山花爛漫時、她在叢中笑。」である。ここで毛沢東は、梅が春を連れてきたが、決してそのことを自慢してはおらず、ただ多くの花のなかに身を隠し春の到来を心から喜んでいる”という梅の尊さを頌えている。いずれにしても、梅は気品の高い植物として高く評価されている。ゆえに、中国人の女性は、梅という名前が多いのである。

蓮の花：蓮の花は、中国語では「荷花」か「芙蓉」と呼ばれている。蓮は汚い泥のなかに成長しているが、蓮の花はすこしも泥臭くなく、とても純潔で、香りもよく、気品が高い。昔から、蓮を湛える漢詩、漢文はたくさんある。たとえば、宋の周敦頤の有名な漢文「愛蓮説」がある。それは、「予独愛蓮之出淤泥爾不染、濯清漣爾不妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭亭淨植、可遠觀爾不可玩焉」という内容である。それを日本語に訳すと、“汚い泥のなかから出てくるものだが、泥に汚染されることはない。清らかな水で洗われたようだが、決して妖艶ではない。蓮の茎はまっすぐで、枝や藤のつきまといもない。香りは遠いほど気品がよい。真っ直ぐに立っている蓮の花は、遠くからの鑑賞はできるが、近くで弄ぶことはできない。私はただ蓮の花を愛している。”という意味である。それ以来、中国では、蓮の花は、花の王様とされ、「出淤泥爾不染」という定評を受けている。

③動物

龍：伝説のなかの龍は、漢民族のシンボルで、天子の象徴である。中国人は、自分を龍の子孫とあって龍を非常に崇拝している。また未来の美しい夢や希望を龍に託する習慣ももっている。ゆえに、龍を使う言語表現はたくさんある。たとえば「望子成龍」や「龍鳳成祥」、「龍騰虎躍」などがある。中国大陸では、「龍的伝人」というたいへん人気の高い歌がある。そのなかで、龍の子孫であることを中華民族の誇りとして歌われている。昔の中国の皇帝は、着る服、座る椅子、ベット、皇帝の使っているものには、何でも龍がある。皇帝の体も「龍体」という。皇帝自身は、「真龍天子」と名乗り、その子孫はみな「龍子」、「龍孫」になる。要するに、龍は、中華民族のシンボルであり、中国の最高の地位を象徴している。

亀：中国人が皇帝を「真龍天子」と呼ぶのは、漢の時代に入ってからのことである。それ以前の中国人は皇帝を「真亀天子」と呼んでいた。そのとき、亀は尊ばれ、神のような存在であった。伝説によると、有名な「女媧補天」も「大禹治水」もみな亀の助けがあったからだといふ。また亀の寿命が長いことから、中国人は亀を長寿のシンボルとしていた。たとえば百歳以上のことを「亀齡」という。要するに昔の中国では、亀はすべてを支配する神さまとして崇拝されていた。ゆえに、結婚も、生育も、また戦争も、すべて「亀卜」をしなければならなかった。「亀卜」をした結果を後日確かめるために、亀甲の裏に刻み、保存しておく。これが甲骨文である。しかし、元の時代になってから、亀のイメージは甚だしく破壊された。後に、弱虫の人や娼婦の妻をもつ人は亀と比喩されるようになった。また、亀に歯がないことから、亀は「無

恥」（無齒と同じ発音）の代名詞となった。現在の中国では、亀の別称である「王八」は人を罵るときに使われる。

雀：雀は、中国では「喜鵲」と呼ばれ、吉祥の鳥として知られている。結婚のときも、中国の最大の祝日である春節のときも、各家の窓や、門には赤い「喜鵲」の切り紙が貼られ、それは「喜事来臨」を象徴している。また正月に貼る「年画」は、梅に「喜鵲」というデザインが多い。それは、梅と眉の同音から「喜上眉（梅）梢」ということを意味している。つまり喜びは眉の近くにもう来ている意味である。朝、目が覚めたら、もし自宅の庭に雀が鳴っていたら、中国人は大喜びであろう。そして会う人々に「今日は雀が来たからきっと良いことがあるよ」と言うであろう。要するに、中国人は、雀を喜びと結びつけ、彼らにとっては雀がイコール慶事である。

鯉：鯉は、中国語では「鯉魚」と言う。中国人のお正月料理には、欠かせないものが鯉の料理である。それは、鯉は「利」と発音が同じで、また魚は「余」と同じ発音であるので、“年々利益が余るように”という願いが込められているからである。お正月に貼る「年画」には、上記の雀と梅のもの以外に、まん丸い子どもが鯉を抱いているものも多い。また鯉が門を飛び越えようとしている「年画」もあるが、それを「鯉魚跳龍門」と言う。要するに、中国では、鯉は裕福のシンボルとして扱われている。

全体の要約

以上、色彩、植物、動物を表す漢字に内包されている中国特有の文化的な意味について紹介してきた。いずれも、中国の長い歴史のなかで形成され、中国人に一般的に受け入れられ、しかも共通的な認識がもたれているものである。中国の環境のなかで育てられていけば、このような共通的な認識を自然に習得することができる。しかし、その環境で育てられていない限りでは、そのような知識を得ることは難しい。日本人は、中国語を学習するとき、文字通りの意味を学習しているが、その文字の背後に潜んでいる文化的意味を知らないことが多いので、せっかく習った漢字を誤って使ってしまうことになる。ゆえに、中国語を学習するとき、漢字的意味のみでなく、内的な文化的意味も一緒に学習しなければならないと思われる。

漢字に内包されている文化的意味は、上記のような中国の長い歴史に根差して固定的に形成されるものもあれば、社会の変化とともに微妙に変化するものもある。つまり時代の色彩の強い漢字表現もある。たとえば、人の呼び方だけでも、ここ二十年間で大きく変化している。文化大革命時代では、人と人の関係はすべて革命の「同志」であった。ゆえに、知り合い同士でも、他人同士でも、また子ども対老人でも、逆に老人対子どもでも、すべて「同志」と呼び合っていた。その時代では同志が一番よい呼び方であった。しかし、文化大革命が終わって、経済改革が進んでいる現在では、「同志」という呼び方はもう遠いむかしのこととなった。そのかわり、「万元戸」や「大款」や「老板」などの言い方が現れ、いずれもお金持ちの意味である。これは賃金も含めてすべてが平等でなければならなかった文化大革命時代では、想像ので

きないことである。また女性の解放を提唱している毛沢東時代では、女性のことを「半边天」といい、「女強人」をもって女性を高く評価する。これも男尊女卑の昔の中国では考えられないことである。

中国の漢字文化には、漢字の「同音」を利用するものも多い。たとえば、中国では花嫁がうどんを食べさせられる習慣がある。そのとき親戚から“生ですか（「よくゆでたか」という意味）”と何度も聞かれるが、花嫁は“生”と答えなければならぬ。それは火をしっかりと通さないことも子どもを生むことも、中国語では同じ「生」というからである。また中国人は、贈り物をするとき、靴と掛け時計を贈ることはタブーとされる。それは、靴は「鞋」と呼ばれ「邪」と同じ発音、また掛け時計は「鐘」と言われ「終」と同じ発音だからである。友人に「送邪」をしてもいけないし、「送鐘」はなおさらいけない。というのは、中国では、亡くなる人の世話を「送終」と言うからである。

以上分かるように、中国の漢字が中国の文化と密接な関係にある。その関係を解明することは、中国語の学習においても、中国という国への理解においてもたいへん意義があることであり、たいへん興味深い研究課題である。しかしこの領域の研究を調べてみると、たいへん少ないことが分かる。今後、この領域の研究を進めることがおおいに期待される。

参考文献

- 馬 洪海 1995 語言——文化心理的折射 天津市對外漢語教學論文集 天津市對外漢語教學研究會 p212-224.
- 毛 俊萍 1995 漢族人名與中國文化 天津市對外漢語教學論文集 天津市對外漢語教學研究會 p225-234.
- 楊 琳 1996 漢語詞彙與華夏文化 語文出版社
- 常 敬宇 1993 漢語象徵詞語的文化含意 語言與文化多學科研究 陳 建民 譚 志明編 北京語言學院出版社 p127-135.
- 肖 莉 1998 漢語的言語禮節特點 修辭學習2, 復旦大學出版社 p16-17.
- 陳 淑梅 1998 論判定漢字性質的標準及漢字的構意性質 語文建設8, 語文建設編集部 語言文字報刊社 p27-30.
- 譚 德姿 1997 竹與國人傳統的審美意識 修辭學習5, 復旦大學出版社 p1-2.
- 陳 建民 1997 漢語詞語的文化內涵 慶祝中國社會科學院語言研究所建所45周年 學術論文集 中國語文編集部編 商務印書館 p83-89.
- 陳 燕萍 1998 社會文化因素影響下的語言 北京大學學報 哲學社會科學版1, 北京大學出版社 p129-134.
- 劉 兆元 1997 論中國龜文化及其扭曲 尋根6, 尋根雜誌編集部 尋根雜誌社 p5-11.
- 田 桂民 1997 對外漢語教學應注重文化知識的傳授 南開學報 哲學社會科學版6, 南開大學出版社 p50-57.